

2021年10月

課題本 『ねがいは「普通」』

佐藤忠良・安野光雅/著 文化出版局 2002年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

誰であれ、人間は、自分の見たことや感じたこと、そして考えたことを、いったん自分の外に出して表してみたいものなのだとつくづく感じました。

彫刻を主な表現手段とする佐藤忠良氏と、絵画表現の多い安野光雅氏の対談で構成されている本ですが、1912年 生まれの佐藤氏と 1926年 生まれの安野氏だからなのか、14年先行して生きている佐藤氏が屈託なく話し、安野氏の方は、多少控えめな様子を感じ取れました。

本を開く前に「ウム？」と気になったのは題名です。

普通という言葉に鈎括弧がついています。「要注意」のしるしとして付けることが多いので、本人達か編集者かが、こだわってほしいという合図を送っているのかなと思いました。

自分だけの勝手な解釈で「普通」を読み飛ばさないで、と言われていたようです。

もちろん、こちらもこだわります。どんな「普通」を願っているのかと興味津々ですから、どんどん読むというよりも、探しながらという読み方になりました。

〈何の変哲もない〉〈普通に暮らしている市井の人〉〈どこにでもいる人〉〈シツチャカメツチャカではない〉〈目立つ奇妙なことをしない〉〈平均やアブノーマルではなく〉〈入って来るそのまんま〉〈突出していない〉

気づきを挙げてみました。が、「普通」という2文字の熟語を読み解いて納得するには、私の想像と少しすれ違っていると気がつきました。私は、「普通」というのは、比べることのできる世界で使う言葉だと思っているのです。

〈怖いよね 今が 普通とおもうこと 大和市 松村和子〉

一月ほど前の新聞の川柳欄にみつけた1句です。

川柳は、事態を平たく言いますが、言葉の抜け道を敏感に防御する哲学者の言い方の例では、「あらゆる技術的な相互接続がなくて強まり、その強度が人口と共に増大する世界においては、実のところ例外が常態になるということだ」と言っています。コロナ禍で、これまでとは違う生活様式が入って来た実感は、言い方は違うにしても、生活様式の中で、「例外の常態化」が「普通」を意味するようになり、川柳では、それを良しとしないことを詠んでいます。

この場合のように、比べる世界にある言葉なので「普通」と言っても、その中身が変化しま

す。結局、最後まで、お二人が願うほどの「普通」はどんなことなのかが解らないまま返却日になってしまいました。

題名には頭を傾げましたが、対談の中身は、なるほどどうなずくことがたくさんありました。対談は、30 個近い区切りをつけて書き並べられています。

「紙に描いたリンゴとデスマスク」は「アーティストとアルチザンの生き方」「似せることと表現することの間」「見る力とえぐり出す力」などと共鳴しあって、絵や彫刻という表現手段を持つお二人の心意気が伝わって来ます。対談だから「文章」で書き表されていますが、心底にある「僕の彫刻を見てくれ」「僕の絵を見てくれ」という「言葉」がにじみ出てくるのが聞こえます。それだけに文学者や思想家の対談より、言葉が曖昧なところも気づきました。話し言葉の文章化なので、対談集は、流れるように読んでいき、大きく浮かんでくるものをつかめば良いのかもしれない。

例会では、それぞれ参加者が心に残っているところを語られました。

私は、お二人の共通する気分として〈自分の目でもものを見ているか、自分の言葉で話しているか〉の項をあげます。

情報化社会といわれ、様々な情報に揉まれる私たちの危うさが「付和雷同」という言葉で示されています。見聞きする情報に対して、自分の物差しが重要だということでしょう。

絵や彫刻で子供達に接するお二人は、良い作品にであうことは、子供達の物差しをすることだと言われます。色々な物差しを差し出すのだと考えれば、大規模から小規模まで、世界中にたくさんの美術館があるのも解ります。そこでは、私たちが言葉で「美」と言っているものを、〈自然に心を動かされた経験の積み重ね〉として作品表現するアートの世界の物差しが見えるでしょうし、音楽も、同じことが言えると思いました。

でもやはり〈人間は自然にはかなわない〉という項を語られるのが、お二人にとっての落ち着き場所である事に安心感を持ちました。自然は、人間の承認を得て存在するわけではないと、常々私は思っていますから。

佐藤氏は彫刻家ですが、彫刻はどこにでも置いてあるわけではありません。しかし、佐藤氏が描かれた『おおきなかぶ』は、絵本ですからどこでも出会えます。私も、佐藤氏との最初の出会いは絵本でした。初めは画家になりたかったと言われるくらいですから、その絵は、生き生きとしています。

安野氏との出会いも絵本からでした。『ふしぎな絵』は、本当に不思議で、人間の錯覚を仲間と楽しく言い合ったものです。その後、次々と出版される『旅の絵本』も、あるようなないような空間を、ひよいひよいと登場する名の知れた物語の場面を探しながら旅をしました。

「言葉(ことば)」は、「コトの端」でもあるという説を実証するような対談集でした。

ただ、その端が、どこまで続き、どんな風に広がるかということは、この本の読み手にとって、また別の問題です。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 YA 】

すべてが対談集ものは初めて読み、お二人から出る言葉そのものだから受け入れ易い。又教科書に携わっておられ、佐藤忠良さんがシベリアに抑留されていたのも初めて知った。芸術の世界で活躍し、生きてゆくのは本当に厳しいものがあると思う。芸術の世界は個人の力量の世界であり、日々毎日が学びであると思う。対談は製作中の厳しい集中から解き放たれた一種の清涼剤に違いない。

◆【 KT 】

共に故郷に個人の美術館をお持ちの偉大な彫刻家と画家の対談集。
○お互いに敬っておられるが、特に年長の佐藤氏を安野氏が尊敬されているように思った。バイカル湖で二人で写生された時どうすることもできない違いを感じられたと。
○シベリアの抑留生活より、その後の彫刻家としての生活の方が比べものにならないほど厳しいと。
○「人間の顔は表札です。中身のある心のいい人がいい顔をしています」
○芸術家でなくても人として大事にするべきこともたくさん語られていた。
○題名の「普通」についての議論もおもしろかった。

『ねがいは「普通」』を読んで

◆【 YA 】

彫刻家である佐藤忠良の作品の実物を見たことが無い。しかし彼のことは以前からよく知っている。彫刻だけでなく、翻訳ものの楽しい絵も知っている。それだけ佐藤忠良が国内外で高い評価を受ける。殊に国内では市井の人を題材にした作品が斬新だったに違いない。又満州に従軍、そこからシベリアに3年も抑留され、その体験をプラス思考に持っていかれた強靱な人間性にも驚いた。安野光雅さんの『ふしぎな絵』や『旅の絵本』等沢山の作品があるが、直筆の絵を見たことが無い。しかし彼の作品もテレビや本屋で沢山目に触れた。題材も面白く、色彩もパステルカラーのような柔らかさで気持ちがホッとする。この著名な二人の対談ものを初めて読んだ。安野さんより一回り以上年上の佐藤さんに対して敬意を表されている安野さんの言葉が印象深い。芸術家というジャンルの人々はチャンスも運命の一つで、世に出ることは本当に厳しいと思う。すべて個人の力量にのしかかる。あのゴッホでさえも生前に売れたのは一枚のみだと言われる。殊に彫刻家や画家は一匹狼の如く個人の世界が存在する。何々派とかに属さない限りは。日本画家堀文子さんの「群れない」「慣れない」「頼らない」をモットーとする生き方に触れた時はそうなんだろうと深く思った。

佐藤さんも安野さんもそれぞれの分野で、それぞれの人生を十分に全うされて、この世に遺された作品を後の人々が鑑賞出来る。長い月日の間には順風満帆ではない時もあったに違いないが、矢張り大切なことは、コツコツと人知れずの努力をされた賜物だろう。

◆【 TK 】

初めて読書会で対談の本を読みました。対談には対談の読み方感じ方がある事がわかりました。

人が人と話をしているのを聞いているようなもので、人の話はあまり当たり障りのないところもあれば強く話したいところもあるという事です。

お二人共故郷に美術館を作り、故郷の思い出、出会った人に影響をうけています。

素朴な人普通に人からにじみ出る事をえぐり出して作品の表現をされています。

今は豊かな時代なので看板がありすぎたり、BGM がありすぎたり、ものが山積みで見たいにも感じる時にもうるさいと感じることが多い事を再認識しました。

仙台の定禅寺通りのプロンズ像が好きでしたのでこういう作家さんに出会えて嬉しかったです。

さらに仕事として、注文されて創作するのと、自分の表現としての創作はまた違う事もよくわかりました。

私は侘び寂びとかシンプルとかの気品を大切にしたいとおもいますが、今ラジオをつけてもふと気がつくとうるさい音楽を我慢して聴いていることがよくあります。今の時代は豊かだけど自分で選んで行かないと知らず知らずのうちに受け入れている事になってしまいます。自分は何を追求しているのか見失っている事になるかもしれません。

そして情報が多いのでその目で見先入観を持っているのかもしれない。まず自分で調べることも自分で選ぶ事のきっかけになります。

この本を読んでこんな事を感じました。

◆【 T 】

佐藤忠良と安野光雅…偉大な芸術家で、才能があり、素晴らしい作品を生み出していて、なお且つ沢山の人々に認められている天才。この「普通」ではないと思われる二人が思っている「普通」とは何だろう？なぜ「普通」を願うのだろうと疑問を持ちながら本を手にとった。

本の中に、「普通」という言葉が二か所出てきた。一つ目は、佐藤さんの話の中に「僕の作る人物像は、いつも普通に暮らしている市井の人が中心です。どこにでもいる人の、素朴な人間性に惹かれるのです。そんな存在を通し、人間の厳しさや優しさを彫刻で表現したいと願っています。」

もう一つは、安野さんの言葉で、「表現と呼ばれているもの全部がそうなんだけど、『普通にやればいいのになあ』といつも思っているんです。」「コマーシャルは普通じゃないでしょう？……普通の時ほど、こちらの胸には迫ってくるものです。」「映画や芝居で俳優さんが表

現するときでも『ごく普通にやったらいいのに』と思う。」「建築でもそうですね。・・・『ごく普通にやればいいの』って思います。』手間もかかるし目立たないけれど、長い間にはそっちのほうがかっと落ち着いて、人々にも認められる時が来るんです。」

二人の考えている普通とは、地位とか名誉とか金を持っているとかいないとかを判断基準にするのではなく、人間性や生き方を見ているように思える。佐藤さんの、「中身のある心のいい人が、いい顔をしています。」という言葉や、「どんなに素晴らしいものでも気品のないものはダメだ。隣人へのいたわり・憐みがないものからは本物の芸術は生まれてこない。」からも心の大切さ、生き方の大切さが伝わってくる。

気品のある態度で、周りの人々への思いやりを持ち日々を生きていくことと自然の素晴らしさに気づき自然と調和して生きることが彼らの願う「普通」なのであろう。

佐藤さん安野さんの作品とリンクしながら読めて楽しい本だった。

◆【 N2 】

本の扉を開くとお二人のいいお顔の写真が出迎えてくれます。

これはお二人の表札なのでしょう。

始めの忠良さんの一文で、忠良さんは安野さんを勉強家で物識りだと書かれています。物知りではないのです。物知りではなく、物識りなのです。つまりただ知っているだけではなく、きちんと対象を認識して、心で受け止めている人ということなのでしょう。

ある程度の収録時間の中でお二人の考えが語られたのですが、限られた字数の中にエッセンスを詰め込んであるので内容をじっくり読み込むことなくずっと軽く読めてしまいました。しかし感想文を書くに当たり再読すると、勝手に読み違えたり、勝手に解釈していた箇所が多々あることに驚き、軽く読めてしまうことは危険だと実感しました。

芸術作品は自分で見て触ってみなければいけない。経験しなければいけない。時間性と哲学、思想的なものを内蔵していなければ長く鑑賞に堪える芸術とはならない。基礎であるデッサンに力量すべてが現れ、作家の力を露呈してしまう。確かに線を一本引いただけで、血の吹き出るような生々しさ、強さ、柔らかさ、落ち着き、面白さ等が表現できるまでには何千万本の線を引いて身に付けなければいけないのでしょう。

作品の中に、モデルの過ごしてきた時間性や喜びや怒りを粘土の中にぶち込むことに彫刻家の苦しさはある。しかしその作家の葛藤を、鑑賞する者は受け止めることができるのでしょうか。鑑賞する者にもそれなりの力量が無いと鑑賞することが出来ないのです。その力を育てるにはとにかく自分の目で本物を見ること触れることが大切で、らしいものという偽物の中で触覚感が育まれていくことはとても怖いことなのです。等々、気づかされる言葉が多いのですが、何時間かの対談を編集してあるので、なんとなく中途半端な感否めないのです。

終わりの安野さんの文章に美とは何か、それは我々が自然の中で生きていくときに、その自然に心を動かされた経験の積み重ねが、「美しい」という感性を育ててきたのだ。とあります。

そして佐藤さんは生まれながらにして自然のデッサン力を持っていて、そのデッサンには尊

厳というしかないほどの真実をため込んでいる。と佐藤さんへのオマージュで締めくくられています。

この本の後に、安野光雅、藤原正彦の対談「世にも美しい日本語入門」を読んだのですが、安野さんの科学・数学・文学・に対する造詣が面白く、お勧めです。

◆【 MM 】

タイトルにある「普通」ってなんだろうという話になった。普通があるからには特別があるのだろう。普通ではない何かがあるから普通が際立つ。本文に何度か「普通」という言葉が出てきて、それぞれの「普通」に相對するものがあつたように思う。

佐藤忠良が書いた冒頭の安野さんとの対話というエッセイでまず出てくる。「僕のつくる人物像は、いつも普通に暮している市井の人が中心です。どこにでもいる人の、素朴な人間性に惹かれるのです。」とあり、「地位や名誉の有る無しに関わらず、中身のある心のいい人が、いい顔をしています。身近な人や行きずりの人の中にも本ものがあるということを、あらためて思います。」と佐藤氏は続けた。ここでいう「普通」はちまたにいる何でもない人であり「地位や名誉の有る人」と對比していると私は捉えた。

バイカル湖の章ではウケを狙った個性と普通にやることを對比して語られていた。「習い事は枠に入って、枠から出でよ」という言葉を使って、普通にやることを重ねてこそじわっと出てくる個性が生まれると二人が言う。

津和野の章でも普通が出てくる。安野氏が「私はね『普通にやればいいのになあ』といつも思っているんです」と。ここでいう「普通」は奇をてらうことと相對すると思う。「大袈裟にしたり奇妙なことをせず、普通の、ごくごく普通の時ほど、こちらの胸には迫ってくるものです。」とも安野氏は語っていた。

対談を読んで思ったことは、実物を超える作品を手掛けるようになるには日々の積み重ね（これも「普通」と言えると思う）、デッサンや粘土をこねる、写真ではなく実物に触れることが大事ということ強く感じた。普通であることは簡単そうだが実は難しいし面倒なことではないか。普通であることをすっ飛ばしては特別な何かになれない。

今月の読書会で話に出た「絵に描いてあるリンゴと本物のリンゴを比べたとき、絵のリンゴのほうがいいってことは、どういうことなんだろう」について私が思うことも書いておきたい。本物のリンゴはそこにあるだけ、存在しているだけの物体である。絵に描いてあるリンゴは描いた人がリンゴから感じた、見えていること以外も表現し、つかみ出せたから実物を超えたのではないか。対談の中では「作者のあらゆる哲学的なものや、思想的なものなどが投影できれば、絵のリンゴのほうが実際のリンゴよりよく見えてくる——」と佐藤氏が語っていた。ほかの章では「見る力」という言葉を使って対象から何かをつかみ出せるか、と表現されていた。

課題本の感想文を書いていて「書きたいことはあるのにどう書けばいいのかわからない、うまく書けない」と悩んだ。喉元まで出かかっているのに言い表せないもどかしさも感じた。しかし不思議なのは考えることは楽しかった。自分なりの答えが磨りガラスの向こうにぼんやりと見えているのにはっきりとは見えない。でも今感じていることを書こうとする。これを続けて

いたら何かが見えてくるのではないか、とも思った。